Lutone...

ルトネ
2023
夏
No.003

夏に寄り添う手づくり花火

福岡刑務所

Photo by M.Hashimoto

ゆっくりと流れる時間の中で——

福岡県宇美町

宝満山の麓にある九州最大規模の刑務所「福岡刑務所」。収容定員約二千人の建物の一角には、ひときわ静かに、ひっそりとたたずむ工場があった。

中に入ると、高齢者や体の不自由な者たちが黙々と手作業をしていた。藁を選別する作業と一定の大きさの新聞紙を固く丸める作業。

初めて見る人は、これが何になるのか見当もつかない。

ここは「塀の中」なのか。

そう疑ってしまうほどゆっくりと流れる空気の中で行われているのは、地元企業からの注文を受けた花火の芯を作る作業。

これが色鮮やかな国産花火の一部になることを知ると、ほとんどの人は目を丸くして驚くという。

取り巻く環境の変化

高齢化が進んでいる日本の社会において、刑務所の中も例外ではない。

福岡刑務所に収容されている受刑者のうち、高齢者（六五歳以上）は、約一七パーセント（令和五年四月一日現在）。

高齢受刑者は、加齢による体力の減退、新しい技術や技能を身に付けることの困難さなどから、これらを考慮して、軽作業に従事させるなど、処遇上の配慮がなされている。

さらに、受刑者の減少も続いており、刑務作業の規模は年々縮小している。

こうした状況から、刑務作業も大きく影響を受けている。音の出る作業もひと昔前に比べて減り、座って行う作業が増えた。

刑務所の「その他」。今回焦点を当てたのは、それらの中でもいわゆる軽作業に属するもの。

花形の作業ではないものの、先に述べた環境の変化などにも柔軟に対応しうる可能性を秘める作業の一つである。

現に高齢者や体の不自由な者たちが黙々と手作業をしている工場。

現場へ赴き、そこに携わる人の思いに耳を傾けた。

約六割の「その他」

刑務所の「その他」とは

刑務所の作業は「木工・印刷・洋裁・金属・革工・農業」それらに当てはまらない「その他」という業種に分けられる。

「その他」と呼ばれる作業は、紙折やプラスチック製品の加工作業から伝統工芸などまで非常に幅広く、その種類は多岐にわたる。

大型の機械で家具や金属製品などを作る質実剛健なイメージが強い刑務作業だが、これらの作業に携わる者はほんの一握り。

実は、全国の約六割の受刑者が「その他」の作業に携わっている。

純国産の花火への「こだわり」

福岡の地で子ども向け玩具花火を作り続けています。今では希少な存在となった手作りの国産花火にこだわっています。

花火の繊細で美しい火の変化をしっかりだすことができますし、子どもの頃の思い出や受け継がれてきたものを大切したい。暖かみがあってこだわったものが作れるので、うちは純国産の花火を手作業で作り続けています。

子どもたちが、火薬を使用した花火を買えるのは、平和な国日本だけであると思います。

手づくり花火では、機械製造のように一定の量を大量に生産することはできず、藁の選別や筒の芯を作る工程から人手で作っているため、一つひとつの工程に多くの時間と人手が必要となり、この工程を刑務作業でお願いしています。

花火づくりを刑務所にお願いすることに迷いはなく、受刑者の皆さんにも小さい頃、花火で遊んだことなどを思い出して作業をしてくれればと思いますし、花火づくりの工程に携わり、自分たちが作った花火が、遊び手へとつながり、きちんと社会とつながっていることを感じてほしいと思います。

受刑者の皆さんは、純国産花火にこだわる同志として大切な存在です。出所された際には、ぜひ花火で遊んでほしいですし、自分たちが作ったものが、どういった商品になっているかを見ていただきたいです。

筒井時正玩具花火製造所
三代目　筒井良太さん

昭和4年から約90年続いた福岡県八女市の製造所の廃業を知るや、技術継承のため一念発起で修行。1999年、製造所の廃業とともに現在地で開業した。
伝統は革新の積み重ねでもあると「守りながら磨く。」をモットーに藁の栽培から花火の加工・販売までの全てをプロデュースする国産花火の第一人者だ。

筒井時正玩具花火製造所

福岡県みやま市高田町竹飯1950-1
【営業時間】13:00～17:00 【休日】水・土日祝日
〈7月/8月〉11:00～17:30 【休日】水曜日

更生とは、何度も何度も丸める作業。目の前の作業と同じなんです。

受刑者の職業指導に携わって三八年になります。

地元企業の筒井花火さんとは、古くからお付き合いをさせていただいています。

紙折りなどの作業は、昔は危なくて機械を扱えない者にさせていた作業ですが、高齢者や障がいを抱えた人たちの身体機能の回復・向上の一助となる側面も持ち合わせることから、今では、非常に有用な作業として、その立ち位置も変わってきています。

花火製作といっても、刑務所の中で火薬は扱えないので、新聞紙を固く丸めて花火の芯を作ったり、線香花火の持ち手となる藁を選別する作業をしています。

単純作業とはいえ、花火ですからもちろん安全安心に配慮することは絶対。規格に求められる精度は意外にも高水準なんですよ。

機械ではできないことを担う。手作業だからこそできることは、まだまだ沢山あるんです。

今の時代、刑務作業は地域経済のサプライチェーンの一翼を担っているといっても過言ではありません。

小林作業専門官

受刑者に作業指導を行う作業専門官の存在を知り、社会貢献に自身の技術と知識を生かしたくこの道へ。38年にわたり作業指導を通じて受刑者の社会復帰に尽力している。
「地道な作業であっても、日々技術も自分自身も変化している。些細であってもいい。そこへの気付きを大切にしてほしい。」

それぞれの花火の記憶に、彼らの郷愁と未来があるような気がします。

変わるために必要なこと。気付きを与えたい。

受刑者の生活指導や作業指導に携わって十五年目になります。

彼らの犯した罪は決して許されることではありませんが、悪人ばかりではなく、生育環境や心身の問題などの様々な要素が影響し犯罪に手を染めた人も少なくないのではないかと思うときもあります。

ここで働く受刑者は身寄りのない高齢者だったり体や心に障がいを抱えた者だったり。

そんな彼らに与えているこの作業は、彼らの能力に見合いつつも、更生の足掛かりにはとても有効だと感じています。

だって花火は日本人ならだれしもが夏のよき想い出の一部にあるものですよね。

今は刑務所に入っている彼らも幼い頃や青春時代にそれぞれ花火にまつわる幸せな時間があったようです。

休憩時間には、「これが花火になったら、孫みたいな歳の子たちが遊んだりするのかな」なんて話したりするんですよ。

固く丸めた新聞紙や藁束の向こう側に、在りし日の自分を思い起こしているのかもしれませんね。

徳永看守部長

野球一筋の熱血漢。体力を活かす仕事がしたいと刑務官を志した。実は、理学療法士を目指したことも。
指導は、感情的にならず階段を登るように相手のペースに合わせることを心掛けている。

伝えれなかった「ごめんね」を伝えたい。

社会ではずっとタクシー運転手として働いてました。

お金の使い方を分かっていなくて、ギャンブルなどにたくさんお金を使っていました。

妻が亡くなってしまってからは、もっとひどくなってきて、この頃から人生が狂ってきたと思いました。

今の自分を見たら、母や妻が天国で泣いているかもしれません。

仕事は好きです。

受刑者Aさん

70歳代。「釈放後は、高齢の自分でもできる仕事を探したい。二度と罪を犯さず、人様に迷惑をかけないように静かに余生を暮らしたい。」と思っている。

こんな年なので、できることは限られていますが、どんなことでも任せてもらえるのは嬉しいことです。今の作業も自分に合っていると思います。

子どものころ、夏になるといつも母が花火大会に連れて行ってくれました。そんなことを思い出したりもします。

大切なものを作っていると思うと、いいかげんなことはできません。

私は耳が遠くて、何度も同じことを聞き返してしまうけど、みんないつも丁寧に教えてくれます。

もし願いが叶うなら、この花火を子どもたちが手にとって、笑っている姿を実際に見てみたいですね。

出所したら母や妻が眠る場所に行って、大切な作業に携われたことを報告したい。

そして最期まで言えなかった「ごめんね」を伝えたいです。

受刑者の思い

子どもの頃の花火の記憶が蘇ります。

私も子どもの頃は、手持ち花火を買って、同級生とよく遊んでいました。

完成までを見届ける作業ではないので、イメージしにくい部分もありますが、どういった形で売られているのか、誰がどう楽しんでくれているのかは、正直、気になります。

社会では、お世話になった方たちを裏切ってしまい本当に申し訳ない。情けない。

私たちがとても貴重な国産花火の製造に少しでも貢献できているのであれば、嬉しく思います。

受刑者Bさん

70歳代。「釈放後は、社会で小さな幸せを見つけ出して、のんびり暮らしたい。」と作業を通じて、自身の考え方を見つめ直す日々を過ごしている。

夏の思い出をありがとう そう伝えてください。

二十年くらい前から筒井さんとは、近所のよしみでとてもよくしてもらっています。

ここ数年は、コロナの関係で実施できていなかったのですが、十年くらい前からでしょうか、保育園では、毎年夏頃になるとお泊まり保育で筒井さんの花火を使わせてもらってるんです。

もちろん線香花火もそうなんですが、今では、お絵描き花火（手持ち花火の持ち手部分にオリジナルのデザインを施せるもの）で世界に一つしかない花火を作らせてもらったりして、園児たちもすごく楽しませてもらってるんです。

私は、幼少期に都市部で育ったため、花火をした記憶がなく、実は初めての花火が筒井さんの花火だったんです。

筒井さんの花火の美しさにとても感動したのを今でもはっきりと覚えていますよ。

筒井さんは、花火づくり以外にもパンを作ったり、地域活性化の活動にも熱心な方なんですよ。そんな筒井さんは、私たちの誇りです。

この度、受刑者の方が花火づくりに貢献しているということを聞いて、正直驚きましたが、筒井さんの国産花火へのこだわりと、その日本独特の繊細な花火の表情を描く作業工程の一部を受刑者の方が手伝っていることは、とてもいいことだと思いますし、そこには何か大きな意味があると思います。

園児は、筒井さんの花火を見るととてもいい笑顔になります。園児たちの夏の思い出をありがとうと伝えてください。そして、筒井さんの花火づくりをきっかけに社会復帰に向けて頑張ってほしいと願っています。

竹井愛児園　園長　武末清順さん

60歳。名古屋市出身。
平成15年から竹井愛児園の園長を務め、
子どもたちの成長を見守り続けている。

人と町。伝統。
手のひらが生む繋がり。

Lutone...

2023・Summer
No.003
ルトネ　夏号

– 取材協力 –

福岡刑務所

– 取材先 –

福岡刑務所
筒井時正玩具花火製造所
竹井愛児園

– 企画・取材・編集 –

福岡矯正管区成人矯正第二課
福岡刑務所

– 発行 –

福岡矯正管区

〒813-0036
福岡県福岡市東区若宮5-3-53
TEL：092-661-1138（直通）